

魚たちと眠れ 結城 昌治

著者略歴

昭和2年2月5日東京品川区に生る。早稲田専門学校卒。39年「夜の終る時」で日本推理作家協会賞受賞。45年7月「軍旗はためく下に」で第63回直木賞を受賞。著書に「ひげのある男たち」「ゴメスの名はゴメス」「白昼堂々」「炎の終り」「斬に処す」など。

魚たちと眠れ

昭和四十七年七月二十日 第一刷

定価 五八〇円

著者 結城昌治

装幀者 栗屋充

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 凸版印刷

製本所 大田製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© 1972 Syōji Yūki

Printed in Japan

0093—302460—7384

魚
た
ち
と
眠
れ

〔登場人物〕

彦原	ファニー化粧品社員、洋上大学団長
毛利	〃 同事務局長
田浦	〃 カメラマン
駒津	囑託医

望月伊策	洋上大学講師、俳優
及川弥生	〃 ファッション・デザイナー
桐山久晴	〃 大学教授
砂井安次郎	〃 作家
高見沢梢	〃 美容学校校長

水島陽子	洋上大学生徒
甲斐靖代	〃
庄野カオリ	〃
有田ミツ江	〃
三輪桃子	〃
陣内左知子	〃
折戸玲子	〃
今中千秋	〃

矢野	週刊誌記者
黒木	〃

ハワイへ行く気はないか、と編集長に言われたとき、矢野はあまり気がすすまなかった。ハワイならテレビを見て間に合っているし、どうせ外国へ行くなら、ヨーロッパへ行きたかった。それもあるべく南のほう、スペインかポルトガルあたりを望んでいた。

矢野が勤めている出版社では、大体八年くらい勤めると、海外旅行のチャンスが順番でまわってくる。むろん仕事を兼ねているが、慰労の意味が大きかった。たとえ駆け足のような日程でも、とにかく社用で海外旅行を愉しむことができる。

矢野はまだ勤続七年目だが、ここでハワイへ行ってしまうと、ヨーロッパへ行くチャンスを失うことになるかねなかった。ハワイでも外国には違いないからである。

しかし、この旅行の順番はかならずまわってくるとは限らなかった。仕事の関係で、後輩の社員が先にチャンスを恵まれることも珍しくないから、そう当てには出来なかった。

「何の取材ですか」

矢野は気が乗らない顔で聞いた。

「特に取材の目的はない。例のファニー化粧品、洋上大学だよ。招待したからといって、記事にしてくれというようなことは言ってきたくない。百人の美女といっしょに、アメリカの豪華船でハワイへ行き、見物したりワイキキの浜辺で泳いだりして、帰りはジェット機でさっと帰ってくる。悪くないと思うがね。ほかの週刊誌も、呼ばれているところがあるらしい」

編集長は、矢野の心中を読取るように、眼鏡越しの眼を細めて言った。

ファニー化粧品主催の洋上大学については、矢野も広告を通じて知っていた。創業十五周年を迎えたPR作戦の一つで、新聞や女性週刊誌、デパート、化粧品店などのキャンペーンで応募者をつのっていたのである。横浜からハワイのホノルルまで八泊九日、船は太平洋定期航路の豪華客船セントルイス号、キャビン（客室）はファースト・クラス、ホノルルの一流ホテルに二泊して帰路はジェット機、その費用すべて主催者負担という好条件だった。

矢野が所属している週刊誌は、特に女性読者を対象にしていなかったので、広告は入稿しなかったが、かなり派手な紙面だったから、ほかで見た記憶が残っていた。

応募者の中から、抽選で百名が洋上大学の生徒に選ばれる。幸運の百名である。

「ところが——」編集長は言った。「応募ハガキが二十五万通を越えたそうさ。一人で何十通も出したのがあるようだけど、とにかく二千五百倍以上の競争率というのは、ちょっとないんじゃないかな。旅費が無料のせいもあるだろうが、それだけでは割切れない」

「海外旅行ブームのせいですか」

「違うね。ハワイ・ブームのせいでもない。船旅の魅力だよ。ジェット機なら七、八時間で着いてしまうのに、悠々と九日もかけて行くんだ。今のようなせかせかした時代では、最高の贅沢かもしれない」

「――」
矢野は相槌^{あひづ}を打たないで煙草をくわえたが、その通りかも知れないと思った。いつか札幌へ行ったとき、機内サービスの紅茶を飲んでいるうちに着いてしまつて、少しも札幌に來たという実感が湧かなかった。松山へ行つたときも同様だつた。旅行の愉しきは道中にあるので、例えば東海道五十三次も、新幹線では膝栗毛になるわけがなく、交通機関の發達は、急用なら早いほうがいいだろうが、そうでなければ旅行気分を奪う役にしか立っていない。旅は、目的地に着くばかりが能ではないはずだつた。

「百人の当選者は、もう決まつたんですか」

「決まつている。北は北海道網走から、南は鹿児島に至るまで、平均年齢二十二歳半、全員独身らしい」

「講師はどんな連中ですか」

矢野は煙草をくわえたまま、火をつけるのを忘れていた。まだ氣乗りしない顔をしているが、内心は大揺れに揺れて、最初の態度を急に変えるのがテレ臭^いいだけだつた。

「詳しいことはこれに出ている。眼を通してみて、きみが厭^{いや}なら代わりの者に行つてもらう」

編集長はそつけなく言つて、薄っぺらなプリントをボールペンの頭で叩いた。

プリントは、洋上大学の参加者に対するガイド・ブックだつた。参加者を生徒と呼び、まずファニ
ー化粧品^{化粧品のメッセー}のメッセーがあり、それから就学規則、帰国まで十一日間のスケジュール、五クラスに分

けた講義の時間割、船内やハワイにおける注意事項などがつつき、最後に五人の講師が簡単に紹介されていた。

アイウエオ順に――、

ファッション・デザイナーの及川弥生、

心理学の教授で、テレビでも顔の売れている桐山久晴、

作家の砂井安次郎、

美容学校の校長をしている高見沢梢、

新劇の舞台よりテレビや映画で人気のある俳優の望月伊策。

このうち、砂井安次郎はあまりパツとしない推理作家だが、矢野は彼の連載を担当したことがあって気心が知れていた。高見沢と望月伊策にも仕事で会ったことがあった。高見沢梢とは美容界の取材で一度しか会っていないが、批判的な記事が気に入らなかつたらしく、電話で怒鳴り込んできたからよく憶えている。美容界のボスの一人だ。若くはないが年寄りとも言えない、年齢不詳で、国籍も不明のような白くふくらんだ顔をしている。

望月伊策には何度もあっているが、どことなく冷たい感じで親しめない。テレビなどから受ける印象とは正反対のような人物である。中年の二枚目として売っているが、五十五、六歳になるはずだ。

桐山久晴はテレビで見たことがある程度、へらへらした軽薄な感じで、人生相談までやっている。四十歳くらいの男だ。

及川弥生は雑誌のグラビアで見ただけだが、かなりの美人である。スタイルもいいし、自分がモデルになってもおかしくないくらいだった。銀座と青山、京都にも店を持っていて、だからただの美人デザイナーとして有名なわけではなく、商売の腕も相当なものに違いなかった。

矢野は講師の顔ぶれを眺めていたが、実際は講師など誰でもよかった。百人の女性と船でハワイへ行くというイメージがふくらんで、その華やかなイメージに圧倒されそうだった。想像力が強いのはなくて、想像癖が強いのである。想像するだけで、実行は滅多に伴わない。

しかし、今度の彼はいつもと違っていた。プリントを渡される前から、その気になっていた。ヨーロッパへ行く順番をはずされても、ハワイへ行くほうが面白そうだった。

「行かせてください」

矢野はしばらくぼんやりしてから、編集長に返事をした。

3

それから三カ月経った。

四月中旬、風はまだ冷たかった。

「確かに豪華船だな」

セントルイス号の白い船体を見上げて、黒木が張切った声で言った。取材の名目で、矢野といっしょに行くことになった女性週刊誌の記者である。マスコミ関係は、ほかにもう一誌加わる予定が取消しになり、矢野と黒木の二人きりだった。

セントルイス号、一万八千トン、旅客定員はファースト・クラスが約三百人、エコノミー・クラス約二百人の計五百人である。横浜を出航したあとは、ホノルルを経てサンフランシスコに帰港する。

黒木が言ったように、確かに外観は堂々たる豪華船だった。

しかし矢野は、出国手続きを済ませてトラップを上り、キャビンに入った途端に失望した。大分薄汚れた感じで、ベッドは肩幅くらいしかない狭さで、窓もテーブルもシャワーもない。僅か二畳くらいにベッド、洋服箆、トイレを詰込んだ形で、到底くつろぐような余裕はなかった。

「これでもファースト・クラスかい」

となりのキャビンに入った黒木が、間もなく矢野のキャビンを覗きに來て、むくれたように言った。黒木のキャビンも、矢野のキャビンと全く同じだった。

そこへファニー化粧品社の社員で、洋上大学の事務局長という肩書がついた毛利が通りかかった。

黒木は、早速毛利をつかまえて不平を鳴らした。

「申しわけありません。我慢してください」

毛利は低姿勢だった。

毛利によると、ファースト・クラスといっても、寢室と居間に分れているスイツ・ルームからバスもシャワーもトイレもない四人部屋まで十一段階の格差があり、生徒の大半は二人部屋か四人部屋だという。一般乗客と混らないように、洋上大学一行百余人のキャビンをまとめて取ろうとした結果で、已むを得ない様子だった。

「すると——」黒木は言った。「ぼくたちの部屋はファースト・クラスのうちの下級クラスか」

「下級でもないでしょう。個室で、トイレがついてますから、中級の下くらいじゃないですか」

「でもこの部屋を見たら、豪華船なんて言えないぜ」

「古くなったのは仕様がないうですよ。何しろ二十年以上経っています」

「二十年以上も前から、ずっと引続きの豪華船か」
黒木は慥然とした面持だった。

共用のシャワー・ルームは近くにあつて、ダイニング・ルームはもちろん、ラウンジ、喫煙室、図書室、バー、プールなどの設備は間違いなく豪華船である、という毛利の説明だった。

「キャビンは寝るときだけ、と思つてください」

毛利はそう言つて、細い廊下を忙しそうに去つていった。

やがて銅鑼が鳴り、アナウンスが聞えた。銅鑼は、見送り人に下船を促す合図だった。

「デッキへ出てみるか」

矢野が言つた。矢野も黒木も見送り人はいないが、狭いキャビンに閉じこもつていても仕様がなかった。

4

廊下を通り抜けると、船客係の事務所と写真屋が並び、左右の隅がロビーになっていた。

洋上大学の主催者側は、この左手のロビーに机を置いて事務局の窓口を設け、つねにファニー化粧品スタッフか、旅行代理店の者が生徒や講師たちの連絡に當つていた。

矢野と黒木が事務局の前に来ると、ファニー化粧品の事業部長で、今度の旅行では団長の肩書がついた彦原と、事務局長の毛利、ほかに生徒をまじえた数人が何か揉めてるように言い合つていた。好奇心の強い黒木は、すぐにその仲間に首を突っ込んだ。

矢野は黒木を置去りにして、エレベーターでプロムナード・デッキへ上つた。

すでに送別風景が華やかに展開されていた。一般乗客も総出のようだが、洋上大学の生徒は、水色の明るいユニホームに白いスカーフを巻いているので一目で分つた。若い女性ばかり百人、それも大

部分が初めての外国旅行で、棧橋も見送り人の顔でぎっしり埋まっていた。

「さよなら——」

「行ってくるわよ」

「元気でね——」

デッキから棧橋へ、棧橋からデッキへ、七色のテープがさかんに飛び交っているが、テープはなかなか目指す相手に届かない。港の別れは感傷を誘うらしく、一生の別れを惜しむように涙ぐんでいる女性が何人もいた。デッキから落ちそうなほど体を乗り出して、けんめいに手を振っている女性もいる。

汽笛が物悲しげにひびいた。

しかし、テープ屋を儲けさせるつもりかどうか、船は午後四時の予定を過ぎてもなかなか出航しない。

棧橋の隅っこの楽隊の演奏が、「さくらさくら」から「軍艦マーチ」に変わった。早く出て行け、という催促のようにも聞える。

「軍艦マーチは厭だな」

矢野の横で、瘦せた肩を寒そうにすばめていた作家の砂井がつぶやいた。

「なぜですか」

「戦争に行くみたいじゃないか」

「砂井さんは戦争に行ったことがあるんですか」

「ないよ。戦争が終ったとき、ぼくは中学の一年生だったからね。でも、あの音楽を聞くと、どうも戦争に引っぱって行かれるような気がする。あんたは何も感じないかい」

「別に感じませんね」

「そうかな」

砂井は眼をそらした。

砂井が眼をそらした方向に、矢野は胸が熱くなるような女性を発見した。水島陽子、乗船する前にファニー化粧品の本社で結団式がおこなわれたが、そのとき、百人の生徒がつぎつぎに立って自己紹介をした。水島陽子の名前は、その美しさとともに、そのときから矢野の胸を熱くした。

もっとも、美人を見て胸の辺が熱くなるのは矢野の体質だから、その生理現象に深刻な意味はなかった。結団式の会場では、水島陽子に限らず、かなりの女性が矢野の胸を熱くして、矢野は大分のぼせ気味だった。

しかし、矢野の胸はすぐ熱くなるが、平静に戻るほうも割合早かったから、のぼせ状態が続いていたわけではなかった。デッキの上で、その状態が再発しかけているだけだった。とにかく水島陽子は、彼がいちばんきれいだと思った女性である。

「ハワイへ着くまでに、面白い事件が起らないかな」

砂井が振返って、退屈そうに言った。

また汽笛が物悲しげにひびき、楽隊の演奏は「螢の光」に変わっていた。

船がいつの間にか栈橋を離れた。

テープが千切れ、手を振っている見送り人の姿が、煙るように小さく霞んでゆく。

もう「螢の光」も聞えない。

——さらば祖国よ。

矢野も少し感傷的になっていた。

陸地が遠くなると、デッキにいた客はつぎつぎにキャビンへ降りて、砂井安次郎もいつの間にか姿を消していた。

「とうとう日本ともお別れだな」

それまでどこにいたのか、女性週刊誌の黒木が現れて矢野に言った。物事を大げさに言う癖のある男だが、ハワイで二泊したらすぐ日本へ戻るのに、永遠に日本を離れるような口ぶりだった。彼も多少感傷的になっているのかも知れない。

「さっきは何を揉めてたんだ」

矢野は、洋上大学事務局の窓口を設けたロビーで、団長の彦原や事務局長の毛利が、数人の生徒に囲まれていたときのことを聞いた。

「おもしろかったぜ。シャワーもトイレもない四人部屋なので、エコノミー・クラスに詰込まれたと思ったらしい。洗濯物を干す場所もないという苦情もあって、船が出ないうちから、彦原団長は頭を抱えていた」

「なかなかやるじゃないか」

「招待されたからといって、おとなしく引っ込んでいないところがいい」

「おれたちもやるか」

「いや、実はおれもその気になりかけたが、彦原さんの様子を見ていたら気の毒になった。これから先が思いやられるよ。生徒たちは彦原さんの説明を聞いて納得したようだし、おれたちのほうは曲り

なりにも個室で、トイレつきだからな。主賓の生徒が四人部屋で我慢するなら、あまり文句を言えない。それより、そのあとがまた面白かった。高見沢梢がさんざんにごてた」

高見沢梢、美容学校の校長である。ツイン・ベッドのキャビンに入ったが、そのツインたるや、粗末な二段ベッドで、昼間は上段のベッドを降ろしてソファにできるといふ便利を兼ねていた。

しかし彼女は、これが気に入らなかった。シャワー、トイレ、洋服箆箆に化粧台までついているが、娘時代からこんな狭い部屋で寝起きした憶えはないという文句だった。ファニー化粧品は礼儀を知らぬ、講師を軽く見ていると言って、大へんな見幕だったらしい。

「それで彦原さんはどうした」

「また頭を抱えたよ。部屋を変えないなら、船を降りるか、自費で別の部屋をとると言われては仕様がな。船客部長に交渉して、もう少し上等の部屋に移ってもらった」

「いい部屋が余っていたのか」

「満員だと言っていたが、余っていたんだな」

「しかし、そうなればほかの講師も文句を言うだろう」

「だから、ほかの講師には多分内証だね。大体、高見沢梢は結団式のと時から頭にきていたんだ」

「なぜだ」

「気がつかなかったか」

「何があったのだろう」

「講師紹介の順序さ」

講師の紹介はアイウエオ順だった。

しかし、年長者ということで学長になった望月伊策がまず演壇に立ち、それからアイウエオ順に紹

介されて挨拶をした。つまり、望月のつぎが及川弥生、桐山久晴、砂井安次郎とつづいて、高見沢梢が最後だった。

「女の講師は及川さんと高見沢の二人きりだ。それでライバル意識があつたんじゃないかな。高見沢は自分のほうがキャリアも知名度も上だと思つてゐるに違ひない。しかし、若さと美貌では及川さんになかなわない。その辺の心理は桐山教授に聞かなくても見当がつくが、とにかく高見沢は百人の生徒に對して、自分のほうが及川さんより上だということを見せたのだと思う。それがビリっけつで紹介されたから頭にきた。結団式の司会をした毛利さんに、ファニー化粧品は洋上大学を五十音図で運営する気か、もしそうなら、望月伊策の学長もおかしいと言つて振^わじ込んだらしい。毛利さんは汗だけで弁解してゐた」

主催者としては、女性講師が高見沢梢ひとりでは寂しいだろうと察して、及川弥生を加えたのである。及川弥生なら仕事の競争相手ではないし、それにファニー化粧品と高見沢は、商売の關係で以前からつながりが深く、揉め事があればむしろ力になつてもらえるという考^くえで、講師紹介の順序などはどうでもいいと思つてゐたのだ。

「女同士は難しいよ」

黒木が呟いた。

たった二人の女同士が難しいなら、百人の生徒同士はいつた^いた^いどうなのか。全国各地から集まつた彼女らは、お互いに顔も名前も知らなかつた偶然の百人で、ハワイまでの九日間を同じ船の中で暮らすのである。たとえ厭な相手がいても、太平洋に飛込んで鯨に食われる以外に逃げ道はない。

海が次第に昏れてきた。

まだデッキにもたれて、海を眺めてゐる生徒が何人もいたが、矢野がいちばんきれいだと思つた水

島陽子は、とうにキャンピンへ降りたようだった。

6

ファースト・クラスの船客は約三百人が定員だが、二人部屋を一人で占める者や、空室もあったから、実際は二百三、四十人で、ほぼ半数が洋上大学の関係者だった。生徒百人に講師が五人、ファニ―化粧品は彦原団長、事務局長の毛利、会計担当の森石、カメラマンの田浦、それに嘱託医の駒津ドクターを加えた五人、さらに旅行代理店から曾根、小野寺の二人、取材関係が矢野と黒木で、以上の百十四人が洋上大学の一団だった。

しかし、ダイニング・ルームは全員を収容しきれないので、一般の乗客と同じように、洋上大学の生徒たちも食事時間を早番と遅番に分けた。

夕食は早番が六時半から、遅番が七時四十五分からである。

矢野も黒木も遅番だった。テーブルは隅っこの19番。このテーブル・ナンバーは下船するまで変らない。

六人掛けの円卓だが、19番テーブルは矢野と黒木と田浦カメラマンの三人だけで、ゆったりしているが、半端な感じを否めなかった。

「どうせおれたちは半端なんだよ」

黒木は面白くなさそうに言った。

講師は出入口に近い中央のテーブルで、五人の講師と駒津ドクターがいっしょだった。

しかし、隅のテーブルのほうが眺めは悪くなかった。生徒はテーブルごとに六人ずつかたまって、